

# 土佐左兵衛について

松尾 芳樹

土佐左兵衛という名を聞いてもたいていの人は首をかしげてしまうに違いない。ただでさえ少ない近世土佐派に関する記録を見ても、その名を見ることは稀なはずだ。

しかし、土佐派粉本の中には、この名が少なからず登場する。例えば、年紀はないが模写と思われる「柿本人麿像」（『土佐派絵画資料目録(二)』5)には「土佐左兵衛」の墨書があり、元禄三年(一六九〇)の年紀がある「柿本人麿像」（『土佐派絵画資料目録(二)』26)には「大阪手嶋十左衛門へノ中尊、両脇伊勢小町、是ハ將監左兵衛」という墨書があつて、どうやらこれが、土佐のかなり中核にある人物であることが分る。

話を簡単にするためにもまず結論から言うと、この左兵衛という人物は土佐光起の孫土佐光祐のことらしい。「拾得像」（『土佐派絵画資料目録(三)』43)には「土佐左兵衛光高之写」とあつて、土佐光高がこの左兵衛の名を使っていたことが分るからだ。光高は光祐の初名とされる。しかもこの図と対になる「寒山像」（『土佐派絵画資料目録(三)』42)にはただ「土佐光高之写」とあるのみだから、左兵衛は通称のように、あまり形式ばらずに用いられたようである。

先の元禄三年「柿本人麿像」の場合、年紀から考えて、中尊の人麿は歿する前年の光起の作と見てよいから、両脇の伊勢と小野小町はそれぞれ、当時左近衛將監であつた光起の子土佐光成と、左兵衛なる人物によって描かれたことになる。この状況は、左兵衛が光成の子光祐と考えるならば、まことに説明がしやすい。つまり、左伊勢像は光成、右小町像は光祐となつて、三代合作の対幅となるからだ。光起には「伊勢図」が、光成には「小野小町図」が遺されており（『近世における大和絵の展開』敦賀市立博物館／1994）、粉本の中にも「衣通姫像」（『土佐派絵画資料目録(二)』47)のように土佐光成と思われる作者によって小野小町図、伊勢図が描かれた記録があり、これらが光起以来の得意な画題となっていたことがよく分かる。



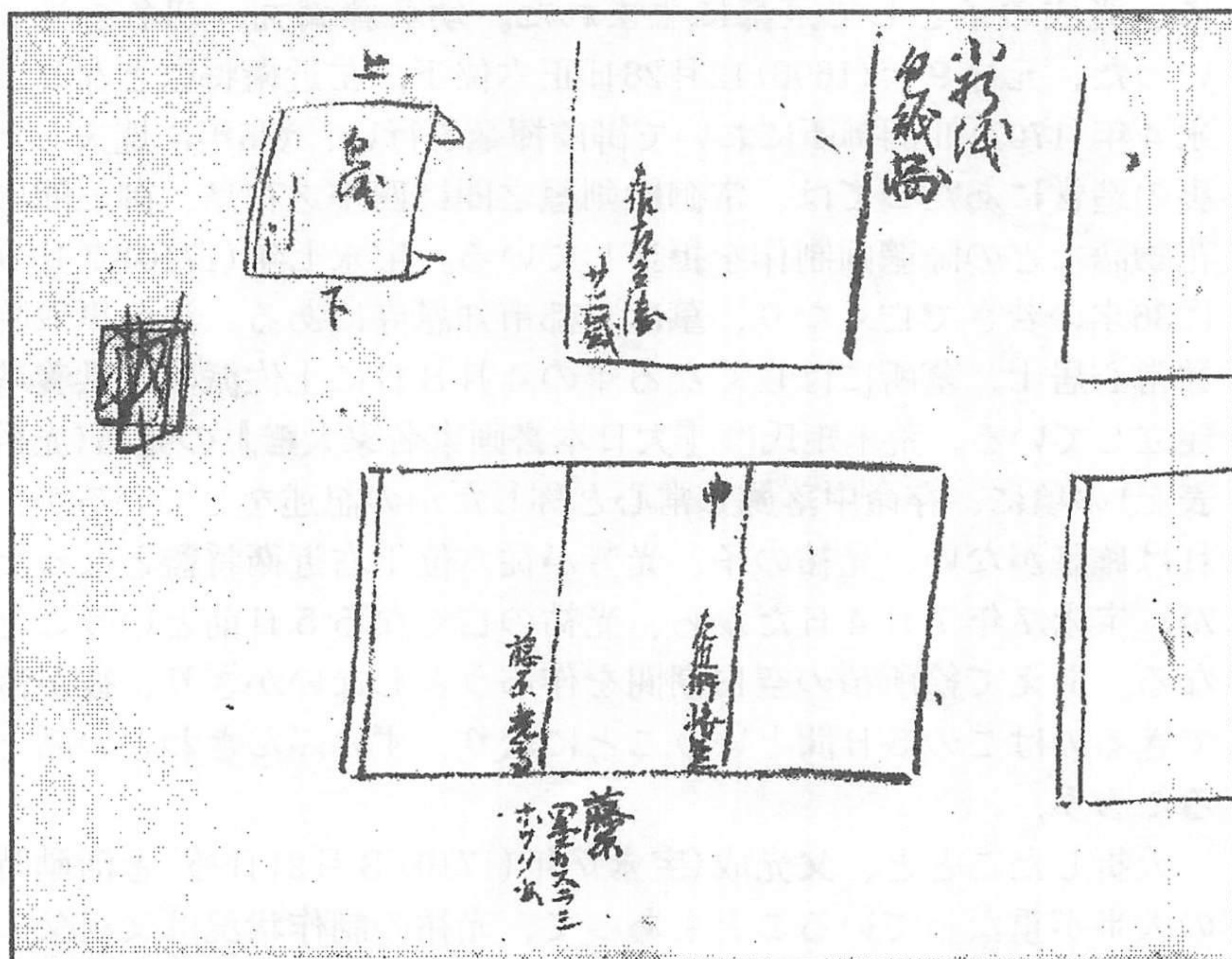
光祐について、その略伝を確認しよう。延宝三年(1675)2月20日に、光成の子として京都に生まれた。幼名藤満丸。初名を光高と書いた。元禄9年(1696)12月28日正六位下、左近衛将監となり、宝永4年(1707)仙洞御所において御前揮毫を行い、翌5年に焼失した内裏の造営にあたっては、常御殿剣璽之間に四季之花鳥、御三間に栄花物語などの障壁画制作を担当している。宝永七年(1710)7月9日に36才の若さで亡くなり、墓は京都市知恩寺にある。法名摂取院光誉常心居士。墓所には亡くなる年の4月8日に土佐派累代供養塔を建立している。荒木矩氏は『大日本書画家名家大鑑』の光祐(光裕と表記)の項に、存命中落飾し常心と称したかの記述をしているが、これは確証がない。光祐の子、光芳が従六位上右近衛将監となったのが、宝永7年7月4日だから、光祐の亡くなる5日前ということになる。あえて絵所預の空白期間を作ろうとしないかぎり、彼が落飾できるのはこの5日間ということになり、ずいぶんきわどい話となるだろう。

夭折したことと、父光成(宝永7年(1710)3月21日歿)と活動時期の大半が重なっていることもあって、光祐の制作状況は父祖父の影に隠れがちである。光高、あるいは光祐の墨書のある粉本を概観するかぎり、光起、光成の画風を継承して、手堅く穏健なものであったようだ。

土佐派絵画資料中の「留帳」(旧目録番号350)には、この土佐左兵衛について、興味深い記録がある。これは12.1cm×34.2cmほどの大きさの帳面だが、切り取られて一部しか残っていない。その残されたところに、土佐左兵衛が左近衛将監への任官を願って坊城家と交渉した一件に関わる記録が記されている。そこには、土佐光高の名と正六位下左近衛将監の叙任が示されるとともに「土佐左兵衛廿二歳」と記した色紙が存在したことが示されている。廿二歳といえは元禄九年(1696)に光高が叙任を受けた年令であり、左兵衛が将監職を願って坊城家を訪れたとある記事から判断しても、左兵衛を光高の名と見る有力な証拠となる。

ちなみに、この時光高が交渉した坊城家の人物は、この元禄九年の口宣案(『近世土佐派記録(二)』13~18)で職事を務めている坊城





小杉紙  
色紙圖

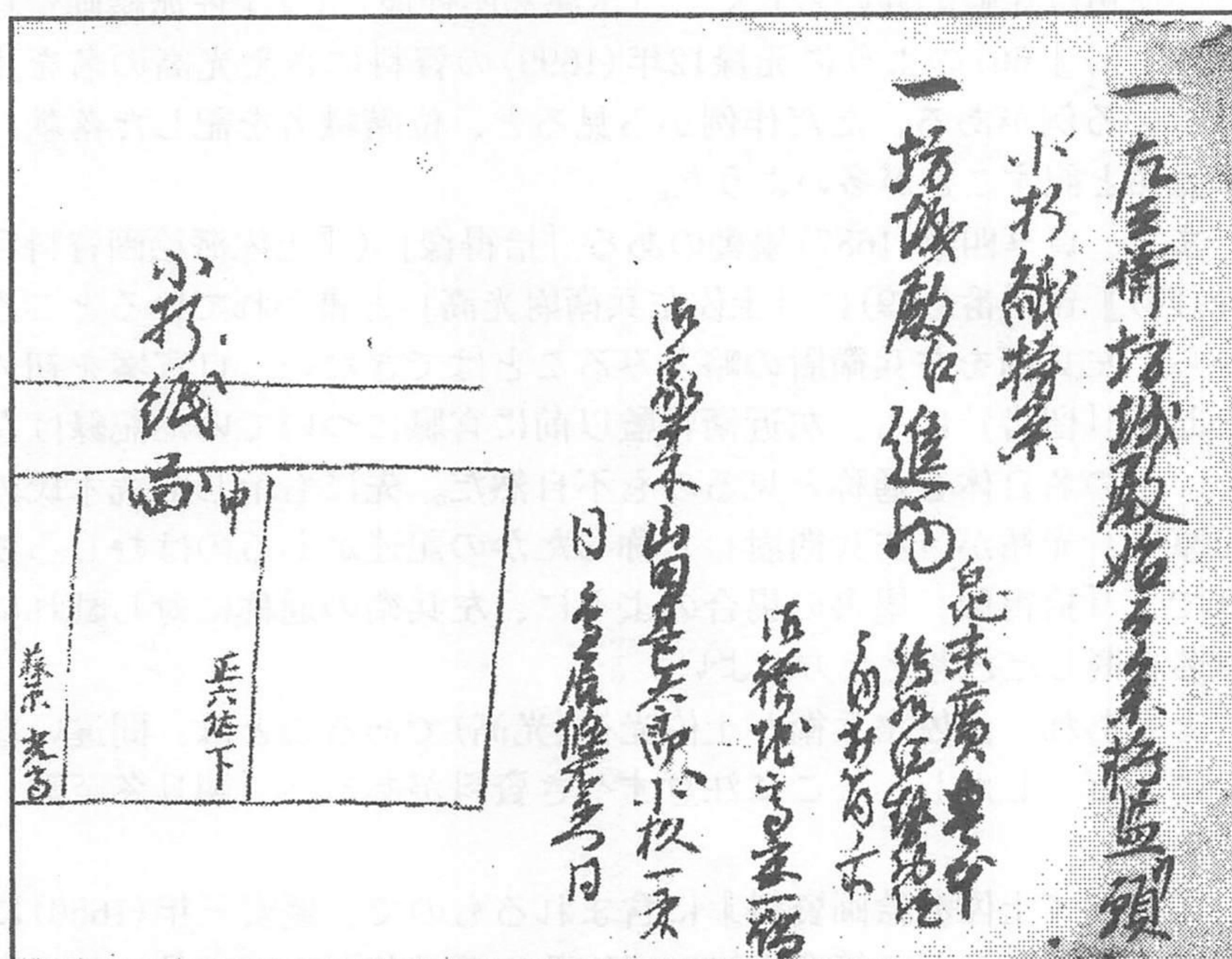
土佐左兵衛  
廿二歳

申 左近衛将監

上  
色紙  
下

藤原光高  
墨カスラシ  
藤原  
ホソク書





一左兵衛坊城殿始而参将監ヲ願

小杉紙持参

一坊城殿江進物

白地末廣壹本

絹地伊勢物語

之内并筒ノ所

御袴地高宮一端

御家来山田甚太郎へ小杉一束

同鳥居條右衛門 同

日 吉原條右衛門

御家来山田甚太郎へ小杉一束

小杉紙圖

申 正六位下

藤原光高



俊清であろう。口宣案は藤原光高の名が記されているから、光祐の名の使用は比較的遅いらしく、「玉津島明神像」(『土佐派絵画資料目録(二)』60)のように元禄12年(1699)の資料にさえ光高の名を用いている例がある、ただ作例から見ると、位階職名を記した落款には光祐と記すことが多いようだ。

また、貞享四年(1687)墨書のある「拾得像」(『土佐派絵画資料目録(四)』資料番号69)に「土佐左兵衛尉光高」と書かれているところから、左兵衛を左兵衛尉の略とみることはできない。口宣案を初めとして「留書」にも、左近衛将監以前に官職についていた記録はなく、この名自体を通称と見るのも不自然だ。先にも示した荒木氏の記事に、光祐が「左兵衛尉」と称したかの記述があるのはむしろ誤りで、「拾得像」墨書の場合のように、左兵衛の通称に対し戯れに職名を擬したと考えた方がよい。

ともあれ、土佐左兵衛が土佐光祐(光高)であることは、間違いないようだ。しかし、ここに注意すべき資料がある。「朔旦冬至図」である。

これは『土佐派絵画資料』に含まれるもので、慶安三年(1650)に行われた朔旦冬至の節会を描いている。朔旦冬至とは11月1日と冬至が重なる日を祝い、儀式を行うもので、同図異時の方法で五番に分かたれた式次第を、紫宸殿清凉殿の周辺に配している。粗略な描写は臨場性を感じさせるが、整理された画面構成はこれが、一種の記録的編集物であることを示している。そして注目すべき点が、この粉本の末に「土佐左兵衛」という名を記している点だ。

慶安三年といえ、当然、土佐光祐はこの世に生まれていない。そして、光成は5才にすぎず、光起ですら絵所預となる4年前である。これが、慶安三年の粉本とすれば、当然土佐左兵衛はもうひとりいることになる。しかも、当時実際に活動していた土佐家絵師は「左衛門」の通称を持つ光起だけだから、この左兵衛は門人と見なければならぬ。果たして二人の左兵衛がいたのだろうか。

もちろん、二人の左兵衛の存在を前提とすれば、一応の説明ができるのだが、その一方で「朔旦冬至図」を光祐による模写と考えることも依然として可能なのである。もちろん、これが模写ならば、



原本の作者が果たして土佐家画人であったかどうか判断できなくなるという困った事態となるのだが、もう一人の左兵衛の存在を確認する手だてがない以上、二人の左兵衛の存在をそのまま受け入れるのにはためらいを感じてしまう。

そこで、ひとつの参考資料として「長谷雄卿草紙模本」を提示してみよう。これは土佐派絵画資料でなく、京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵される模本のひとつだ。名称からも明らかなように永青文庫が所蔵する「長谷雄卿草紙」の著彩模本なのだが、その巻末に「慶安四年辛卯五月節句写之／主土佐左兵衛」の墨書がある。土佐の佐と左兵衛の左が入れ代わっているのは愛敬だが、これは要するに真筆ではないということを示しているだけで、内容的には土佐左兵衛に関るものと見てよい。

この模本が実際に模写されたのがいつ頃かということ、正確に比定しがたいが、固い印象のある紙質や比較的原本に忠実であろうとしているところから、とても慶安などという時代のものではなく、江戸後期それも18世紀末から19世紀初め頃として大過ないように思う。それでは、巻末の墨書をどのように考えればよいのだろうか。これが複模とすれば、原模本の内容が問われるし、模本に加えた偽筆とすれば、土佐左兵衛の名前が臆げながら知られていた事実と、この名が慶安四年という年号に関係付けられている点が問題となる。何れにせよ、この墨書が光祐を意識して書かれたものとは言い難いだろう。だとすれば、たとえ真筆ではないとしても、この墨書は二人の左兵衛の存在に対して、肯定的な材料と見ることができるわけだ。偽筆や偽作というのは、その作者が有る程度知られていなければ意味がないからだ。

土佐光祐の通称としての左兵衛が確認されたいま、確認されねばならないのは、門人左兵衛の存在である。粉本には、門人として、吉丞、三右衛門の名が遺されている。これに左兵衛の名が加えられるかどうかは、今少し資料を集めて判断したい。左兵衛に関する資料について広く知見を求める次第である。